

Q, 全然、読めないのですが？

A. 最初から全部読める人はいません。江戸時代の人でも、寺子屋にいたりして勉強して読み書きを覚えしました。江戸時代は慶長8年（1603）の幕府樹立から慶応4年（1868）まで。200年から400年の時間が経過しています。日本語も社会も変わり果てました。それでも私の子供の頃にはまだ江戸のなごりが漂っていて、私のひいおばあちゃんは江戸の人のような文字を書いていた。しかし高度成長とともに江戸時代のなごりも失われ、語彙も変わって、今の若者にとっては、古文書の勉強はほぼ新しい外国語の習得と変わらないかもしれません。そういえば簡単に思えるかもしれませんが、なんととっても、同じ日本語ですから...

の授業では、初心者用の読みやすい古文書のコピーをテキストとして、勉強します。

ちなみに、一番解読が難しいのは日記や書簡です。古文書解読のプロでも読めない文字はありますし、時々まちがえます（汗）。

Q, 近世古文書の特徴について教えてください。

A. 一口には言えません。江戸時代の古文書は庶民から公家や武家まで、さまざまな身分・立場の人が作成したので、分量が多く、多様です。形式が整った公文書だけでなく、私的な文書も増えましたし、漢文調・和文調などといったスタイルの違いも生じました。一般的には次のような特徴があります。

①書き言葉（文語）は全国共通。

江戸時代の話し言葉（口語）は小説などには使われていますが、身分や地域、男女差により違いが大きいです。「言文一致」は明治以降進行しました。

②草書体です

楷書・行書と違い、草書は筆記のための書きやすさが優先されますので、省略・変形が多様に行われ、崩れた「くずし字」になっています。同じ文字でもくずし方・筆順が異なったり、別の文字でも似たくずし方があります。このくずし方の例を示してくれるのが、古文書の辞書です。

③文字と文字が続けて書かれる。

筆に墨をつけて、さらさら書くと文字と文字がつながる「連綿体」、**「続け文字」**になります。どこで切れるのか、悩みます。

④書風はお家流。

伏見天皇の皇子尊円親王（1298-1356）は、鎌倉中頃に世尊寺流を吸収して字形が整っていて平明な書風をおこしました。これが室町時代には和風の書風の主流となります。『東照宮実紀』右によると、徳川家康の右筆で青蓮院鎮法親王の門弟の建部伝内「徳川将軍御家の書流」として、「御家流」をたて、幕府公文書の書体としたということです。これが手本となり「御家流」は全国に普及します。ただし江戸時代には「唐流」「勘亭流」などの書風も存在します。

⑤公式には、候文で書かれるのが原則。

「確かに預かり申し候（たしかにあずかりもうしそうろう）」などと、文末に候（そうろう）」が付きます。でも話し言葉では「確かに預かり申した」などと話したと思います。江戸時代の候は文章を丁重に表現し、また文章の調子を整えるため、文の切れ目や終わりの部分に補助動詞として使用しており、音読するとその調子の良さに気づかされます。こうした候文は、昭和20年(1945)頃まで公的な文書・法令や書簡などで使われていました。

⑥基本は上から下に読むが、時々ひっくりかえって読むところのある漢混淆文。

例えば、「相違無御座候（そういござなくそうろう）」や「可被仰付候（おおせつけらるべくそうろう）」のように、和文の中に漢文で使われる返って読む文字(返読文字)が混じっています。

⑦現在使われている漢字とは異なる旧字や異体字が使われています。

⑧変体仮名が使われています。

平仮名が漢字の草書体から生まれたことはよく知られていますが、一つの音に一つの仮名が決められたのは明治33年以降のことです。それ以前は、一つの音に複数の文字がありました。明治になって採用された現在の平仮名以外を、変体仮名といいます。

例えば、「乃」は「の」のもとの漢字ですが、「能」も「の」と読みます。この場合の「能」が変体仮名です。

⑨身分制社会が反映される

江戸時代は身分制社会です。身分や立場により行動が制御され、すべての人が状況に応じて正しくふるまい、文書でも尊敬や丁寧などの表現を正しくすることが厳格に求められていました。たとえば証文では、差出人と宛名の名前の位置関係や文字の大きさ、字のくずしかたの程度にも、相互の身分の差が反映します。自分より身分が上の人の宛名には様をつけるが、そうでない場合は殿とするという区別もありました。幕府や領主やその行為など敬意を表すべき言葉の上に1字分か数字分空白にする闕字（けつじ）やわざわざ改行する「平出」（へいしゅつ）などの作法も存在します。こうした「正しい」書き方は当時の人にも煩雑で難しかったので、定式化したお手本である「書札礼」が出版されています。

⑩近世古文書に特有の用字・用語があります。

(例) 急度・屹度 きっと（必ず、きびしく）/草臥くたびれ(疲れ) /扱 さて（ところで）

爰元・爰許 ここもと（拙者）/鳥渡 ちょっと（しばらく）/無抛 よんどころなし（やむを得ない）

Q, 勉強すると、なにか良いことがありますか？

A. 単位がとれます（笑、これ大事）。

①江戸時代から昭和にかけての歴史を勉強したい人は、誰かの本や論文からの引用や活字になった史料集だけでなく、昔の人が書いた文書や古典籍といわれる書籍を利用することにより、研究の幅が広がります。活字になっている史料を利用するときにも、そのもとになっている古文書についての基礎知識があると、より正確に理解できます。また近世の古文書を読めると、「日曜歴史家」・「郷土史家」として、地域史などを自力で研究し続けることができます。

②古文書は人々が作り受け継いできた貴重な文化財、歴史遺産です。しかし都市化や災害などで古文書が消失する危機が常にあります。古文書を「救出」し、適切に保存することは、歴史に関わる者の責務です。その使命を果たすためには古文書を解読して、内容を把握し、整理して「古文書目録」を作ることが必要です。これは博物館の学芸員の仕事としても重要です。

③古い日本語について勉強でき、教養が増えます。文字の「書き順」がわかったりします。

④読めると楽しい（読めないと悔しいけど、外国語と違って全然読めないことはないし、努力すると上達が早いはず）。のれんに書かれた筆文字が読めたり、博物館に展示された古文書を読んでもみようか、という気分になれるかも。私は古文書が好きで、大学院に行きました。